

現代佛敎史學の一視點

平

祐

史

(一)

仏敎史學の歴史的研究に關する成果が非常に多く報告され、就中、著作、力作と呼ばれるものが数多い。適日、仏敎史學會の仏敎史學關係雜誌論文目錄へ三〇、四一〇の作成に協力した際、仏敎學關係に關するものか、その分類に困惑する程、仏敎學關係の多くが仏敎史學の近似性をもつて居ることに今更ながら氣附いたのである。又、近年敎敎大學に於ける仏敎學、並に各家學專攻の大半の卒業論文が史の傾向をもち、本末の仏敎學、各家學へ敎理學的、哲學的立場の研究が非常に少ないと云われている。

この様に仏敎學（哲學的、敎理學的立場）の研究が仏敎史學的範疇に近似性をもつと云う事實は現今の仏敎學研究方法の傾向を示唆する何ものかをもつものと云えよう。

他面、仏敎史學が仏敎學とその研究範疇の限りに關むにかゝわらず「佛敎史學」としての「理論及び方法論」の研究は未尚、数少なく体系的論根據をもたないのが現状である。従つて、その必要性が斯學研究者に強く要望されている。

この様に、仏敎史研究の隆昌が見られるにかゝわらず、「仏敎史學」の確固たる「理論・方法論」研究が何故不振であるか、その原因は何か、加うるに、「仏敎史學」として独自の學問體系をも

つものであるかどうか、に就いて愚問を提示するとともに、かゝる愚問に迷う佛敎史學研究學徒に明確な御示唆と御批判を仰ぐ次第である。

(二)

「仏敎史學の理論・方法論」が尚未体系づけられていない原因に就いて、最も著眼的に次の如き事實を挙げるこゝが出来た。

其一に、佛敎史が他の諸敎科學に於ける史的立場といさゝか異なるものがある。例えは經濟學に於ける經濟史、法律に於ける法制史、政治學に於ける政治史等々と諸敎の史的研究所は趣を異にし、仏敎史の直接研究対象とする「仏敎」そのものが非常に多種多様性を備えていることである。

其二に、元來佛敎史が佛敎學、敎理學研究者によつて仏敎學の余蘊になさ小、而も研究者の大半が僧侶出身の學者によつて研究されてきたこと等が斯學研究不振の原因と見られる。この二つの挙げた原因は内面的に非常な關係性をもつもので終局的には同質の問題となるものである。

此外、種々な條件に起因するであろうが一応この二つ挙げた課題を中心にして論述を試み度い。仏敎史研究の立場が諸敎の科學の史的研究所とは趣きの異なるものをもつと云う事由に於いて、研究対象となる仏敎のもつ多種多様性とは、如何なるものか、一般的に云つて、仏敎とは仏敎の宗教的體驗から生まれた敎説であると云えは簡單であるが、更に仏敎の宗教的體驗が文化化の *culture* されたもので、その文化化の過程に於いて成生された諸敎を含むものであると云い得る。

例えは、現今、佛敎と云えは、葬式をたゞちに想い出すであらうし、又、難解な天台や華嚴、法相、唯識、俱舍等の高尚な哲理、敎理を思い浮べるかも知れない。然し、葬式法事に於ける意味の

わからない謬全や懷香の類と、深遠な教理と一体如何程の關係にあるか、誰れしも即答に苦しむほど佛教の内に種々な構成分子が併合されてゐることに氣付くであらう。

かゝる佛教の儀式や難解な教理の外に、佛教美術或は社会事業、更に佛教傳播の東洋諸地域に於ける環境と民族性との融合による種々の事象と云つた内的外的を含む一切の文化事象を佛教の文化の中に取り生させて居り、かゝる文化化による複雑多岐に亘る構成は所謂、転法輪によつて生ずる現象、即ち佛法僧の三宝に關する一切の事象を佛教と云い、引いては二小を研究する立場を「仏教學（広義）」と名づけ、更に哲學的・教理的・研究を現今では「仏教學」と云われてゐる。又かゝる非常に多岐に亘る仏法僧に關する事象の「仏教史」として、一応の定義を下すならば如何に仏教史が他の諸般科学の「史的研究より複雑な研究形態を持つか」がわかるであらう。

さて、仏教學（教理学的立場）は従来よりその研究に於いて比較的独断的 dogmatic な研究を認容され、従つて時間的なものを超えた研究がある。例えは、馬鳴の著した起信論は、印度撰述であらうと及那撰述であらうと、いふ川に於いても、その佛教哲學的思想に於いては變りぬない。亦「馬鳴」自身が何時代の人であつても何人であらうとも、起信論自体に於いてはその思想には何の變りもない。或は淨土三部經の成立に關して佛説であるか、或は非佛説であるか否か、やうした事柄に關しては、此の場合佛教學の立場に於いてはかゝりがない。唯、その三經の持つ思想、教理が此の場合必要なのである。

これに対して、佛教史學に於いては、佛教學に於ける dogmatic な考えは認容されず、然も仏教そのものを客觀的な事實の儘に認識し、批判的に捉えることはさうつかえない。

こうした「史學的立場は、佛教研究に於いて、前述の佛教學の立場と全く異にし、遂にはその作

業に於いて、所謂「大衆佛教非佛謏論」を生み出すに至つた。かゝる結果、従来の佛敎學の立場は近代合理的科學の上に立脚した正史學の方法を導入せねばならない状態になり、Dogmaticなものゝを認容しなからかゝる傾向へと變^{みちが}じたのである。かゝる正史學的批判を加えた研究は、我國に於いて、明治以來、特に村上專精博士、望月信亨博士、或は木村恭賢博士等の諸先輩によつて行われ来たのであるが、戦後、こつした傾向は益々強^つく、印度學、佛敎學研究の代表的クルームである東大の宮本正尊博士を中心とする人々の作業に「大衆佛教の成立史的研究」(一九五四・三)がある。宮本博士はその序の巻頭に、即ち佛教を現代に生かすも、人文科學のうちに正しく位置づける爲にも、着手せねばならぬ基礎工事は、正史性を眞理性の裏証である。二小はむしろ正史と眞理性にかなふところに佛教の特長があり、それなくして佛教なしと表現すべきものであらうか、現代にあつては、一応「佛教が正史性と眞理性に耐える」ことを裏証する必要がある。と述べられている。この林に現今佛敎學に於いてなされる作業が佛敎史學の方法に於いてなされると同林、更にさざらわしい作業成果となつてあらわれてくるのである。

従つて佛敎學一般の研究の傾向の大半が非常に正史性をもつて佛敎史學的方向へと動いてゐることは拒めない事實であつて、「佛敎學とは佛敎史學だ」と云つてよいほど、その方法に於いて近似性をもつて居り佛敎學と佛敎史學との間には明確に一線を劃すことが出来ないのが現状である。

や二の問題は前述のものと終局的には同質の關聯性をもつものであるが、元來吾が國に於いて佛敎史學の研究者達のその多くが僧侶出身であり、又、佛敎學の余技として佛敎史を取扱つていた。二小らの學者達は、特定の泉流に強^つしDogmaticな佛敎學を研究し、且つDogmaticな佛敎史を敘述したのである。二小らは、特定の泉流に強^つするが故に、批判的な近代史學の立場にある裏証

主義的、合理主義的方法に立つことを許さず、よしんばこれに依るとしなれば、忽ち「異安心」として宗教裁判にかけられ三衣剝奪の憂き目を免れられなかつた。——現今でもこうした異安心問題は或る特定の宗派に於いて起られる株である。——かゝる dogmatic な佛敎史からの解説は僧侶出身でない史家によつて行われ、遂に辻褄之助博士の如き佛敎史の金字塔をうちたてるに至つたが、一方佛敎學に於いても前述の如く宮本博士をして「佛敎が歴史性と眞理性に耐える」ことの研究が現今の佛敎研究の最大の眼目となさしめたのである。

かゝる佛敎研究の立場は完全に独立体系的な佛敎史學の立場を封じ一掃助學としての態をもち、佛敎學は佛敎史學の立場を独專するに至つた株に思えるのである。

かくして、佛敎史學の今後の立場は、かつて佛敎史學が佛敎學にその方法を導入し、佛敎研究をコペルニクス的転回をせしめた新鮮さをもつた当時と同様に、現今の株に佛敎學と佛敎史學が混然と交錯した状態から脱却してより新鮮な「佛敎史學」の立場を設定しなければならぬのではなからうか。

(三)

「佛敎史學」の立場を設定する上に種々なしかも複雑な考察を試みなければならぬ。従つてその前提として、次の如き立場が考えられる。

現今の佛敎研究の傾向が史學的方向にあることに於いて佛敎史學が佛敎學上占める地位は非常に大きい。従つて、佛敎學專攻、佛敎史學專攻の二大立場と云う學分分類も内面的には同質のものであると云える。よつて、佛敎研究は佛敎學と佛敎史學の兩面の態度を最少限度必要とする。

よしんば、各々の研究立場を主張するならば、両面の感覺を備えた上、更に一方の感覺をより強めた所に、各々の研究立場を主張することか出来るのではなからうか。即ち、佛教学（教理学的立場）の研究者は佛教学的感覚と、丁史学的感覺をもつ中で特に佛教学的感覚のすぐれたものであり、佛敎史家は両面の感覺の中で特に丁史学的感覺のすぐれた者がなり得ると云えよう。

以上、スパーズが許さぬので止めるが一応「佛敎史学の立場」を裁定する前提としての試論である。従つて不備な点が二、三又多々あるが、諸賢の御批判と御指導を願う次第である。

（同志社大学大学院文学研究科）